

令和3年度 学校評価書 (計画段階・実施段階)

福岡県立久留米聴覚特別支援学校

自己評価				
学校運営計画(4月)				評価(総合)
学校運営方針	子供や保護者のニーズに応じた専門性の高い教育を提供し、挑戦する意欲や規範意識、自己肯定感、社会性、学力・体力を有する聴覚障がいのある子供(パワフルキッズ)を育成する。そのために教職員自らが子供に対する深い愛情と主体性、向上心をもち、教育力向上へのたゆまぬ努力を続ける。			
昨年度の成果と課題	年度重点目標	具体的目標		
【成果】厚生労働省のモデル事業を実施し、関係機関と連携を図りながら聴覚障がい児及び家族支援の充実に資することができた。 【課題】言語環境の整備と言語活動の充実及びPDCAサイクルに基づく授業改善を図る。	学力・体力の向上	「生きる力」の育成を目指した主体的・対話的で深い学びの実現、学力向上のための授業改善、読書活動の推進、外国語・外国語活動の充実、ICT教育の推進、県内外の競技会への積極的参加及び運動活動の推進、遊ぶ時間の確保等を通じ、学力・体力の向上を図る。		
	言語力・コミュニケーション力の向上	日本語の読み書き力の向上を目指した授業改善、「話し合い」活動の充実、「言葉の時間」の充実、豊かな手話表現習得を目指す場の設定、ろう者や聴者と関わる場を通じたコミュニケーション力の育成、体験活動の推進を通じ、言語力・コミュニケーション力の向上を図る。		
	障がい認識・自己肯定感・規範意識・社会性の向上と危機管理体制の強化	障がい認識を育む教育の推進、キャリア教育・人権教育・道徳教育の充実、生徒指導の充実、パワフルキッズタイム(小・中)の充実、ライフスキル教育の実践、防災体制の見直し等を通じ、社会性等の向上と危機管理体制の強化を図る。		
評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)	次年度の主な課題
教務部	各教科等の目標や内容を見直し、教科等横断的な学習を充実させ、教育活動の質の向上を図る。	・教育課程の編成等に係る協議の場を定期的を設定するとともに、教育課程実践交流会を実施する。[協議の場:各学期1回、教育課程実践交流会:7月]	B	・学校及び学部行事後の評価を次年度の計画に反映させるようにする。 ・教育課程を編成する際の基準となるカリキュラム(重複学級の類型化等)の作成を進める。
		・行事の目的を明確にし、他教科等と関連させながら内容及び方法を検討する。また、実施後の評価を踏まえて、次年度の計画を立案する。[学校及び学部行事の1割削減]	B	
情報教育部	研修会を実施してICT機器の活用を促すとともに、教育活動の様子をHP等で発信して本校教育への理解・啓発に努める。	・プログラミング教育をはじめ、教材制作やICT機器活用の方法等について職員研修を実施する。[年3回以上]	A	今年度、研修会や報告会でICT機器の利用について先生方に伝えましたが、実際の授業場面での支援はなかなかできなかった。ICT支援員さんの活用について先生方に周知するとともにICT支援員と連携しながら日常的な利用を支えていく。
		・HP作成を簡素化し、行事担当者とHP担当者が連携して記事を更新する。[毎月]	B	
庶務部	PTA役員、評議員との連携を強化する。	・PTA役員、評議員との連携。[毎月の庶務部会で情報共有を行う]	A	PTA評議員会での協議・決定事項について、全職員に周知徹底を図る。
		・校内掲示板の管理を行う。[毎部会時に掲示板確認作業を実施]	A	
危機管理部	「緊急時対応マニュアル」及び避難計画の整備と周知・活用	・緊急対応マニュアルの充実、各階の避難経路図を設置し、それを活用し、地域や消防署等と連携した災害対応訓練を実施する。(緊急対応マニュアル7種類、各階階段付近の避難経路図)	A	・年次に速やかに緊急対応マニュアルを見直す。 ・緊急事態宣言が発令された時の柔軟な対応を考えておく。 ・長期休業期間に職員研修を設置し、危機管理について議論する場を設定する。
		・職員研修等を通して、職員同士で議論する場を設定し、職員全体の危機管理意識を高める。	B	
研修部	学力・言語力の向上につながる主体的な取組を目指し学校教育研究や職員研修の充実を図る。	・時期や方法、内容を十分検討し、関係機関とも連携を図りながら職員研修を円滑に実施する。	A	・内容や時期等について十分に検討を行い、職員研修を計画的に実施する。 ・本年度実施した教育課程実践交流会や学校給食研究報告会の成果と課題を基に、学校研究(三年次)を推進する。
		・職員全体に学校教育研究について周知を図り、見直しをもって取り組めるよう研修部職員を中心に学部研修、班別研修を年に10回以上企画運営する。また、関係分掌と連携し、本校主催の研究大会の実践を通して、本校の教育水準の向上に役立てる。	A	
生徒指導部	規範意識を高め、主体的に行動できる力を高めるとともに、互いを思いやり、自他の良さを認め合う人間関係を育む。	・毎月開催しているパワフルキッズタイムの内容の充実を図り、児童生徒の自己肯定感・規範意識を高める。[内容の拡充(毎月)]	B	・パワフルキッズタイムの内容のさらなる充実を図る。 ・学校生活アンケートの結果集約を全職員に回覧する等、情報共有を図る。
		・いじめ防止等対策委員会を毎月開催し、日々の行動観察や毎月の「学校生活アンケート」をもとにいじめ等の早期発見に努める。[年間11回]	A	
保健部	一人一人の心身の状態に応じた保健指導の充実を図り、心身ともに健康な幼児児童生徒の育成に努める。	・スクールカウンセリングのコンサルテーションの内容について、学部内の共通理解を図り学級経営や学習指導に活かす。	A	・コンサルテーション内容を全職員で共通理解できるようにする。 ・新型コロナウイルスの感染状況を考慮しながら、給食準備等の見直しを検討する。
		・学校給食を通して、食に興味をもたせると共に、様々な取り組みを通して家庭での理解を深める。	A	
進路・相談支援部	来談者を増やすと共に、保護者の障がい認識を深め、子どもの育ちに見通しがもてるように、学習会等、情報提供を行う。	・関係機関を訪問し、本校の理解啓発活動を行うと共に、関係機関と連携し聴覚障がいについて幅広く学ぶことのできる保護者教室を計画、実施する。[年間18回 → 年間18回]	A	・教育相談を担当できる職員の育成、乳幼児教育相談担当等の人員の確保 ・キャリア教育全体計画について、全学部を通してどのような生徒の姿を目指すのか見直しを行い、具体的な指導内容について検討する。 ・キャリアパスポートについて、様式、内容等の見直しを行う。 ・保護者への情報提供の在り方の検討
		・幼児児童生徒一人一人のキャリア発達について、保護者と共に取り組むために、キャリアパスポートの活用や保護者学習会における成人ろう者との出会いの機会を設定する等、情報提供を行う。	B	

学校関係者評価	
評価(総合)	自己評価は
幼児、児童、生徒及び家族に対する支援や情報提供等は高く評価される。	A : 適切である
	B : 概ね適切である
	C : やや適切である
	D : 不適切である
項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見
A	教育活動の質の向上を図るために、行事の目標の明確化、他教科との関連について検討するとあるが、
A	今後、ICTの活用は更に重要になると思うので、系統的・継続的に職員の研修を続けてほしい。
A	コロナ禍で、活動しにくい面もあると思うが、学校活性化のため工夫して実施してほしい。
A	災害はいつ起こるか分からないため、安心・安全な学校づくりの意識を今後も高めてほしいと思う。
A	先生方が常に自己研鑽されている。班別研修など研修方法にも工夫がなされている。具体的方策の「教育水準」の向上について、具体的な評価基準があると評価しやすいと思われる。
A	パワフルキッズタイムでの表彰は子供たちにとって励みになっている。子供たちが自ら考え、動く様子が見られる。
A	学校アンケートの中で、給食に対する評価が非常に高いのは素晴らしい。児童生徒及び保護者にとって手話ができるスクールカウンセラーを今後も配置してほしい。
A	素晴らしい取組をされているので、貴校の相談窓口をもっとPRできると良いと思う。 年18回の保護者教室は保護者にとって良いことだと思うので、今後も継続・充実を図ってほしい。

幼稚園部	豊かな体験を通じて、心と体の発達を促し、生きる力、学びの基礎を培う。	・幼児の発達段階に応じて、定期的に運動遊びの時間を設定し、体力の向上を図る。[週2回]	A	B	B	・年間指導計画の更なる改善する。(より実用性のあるものに) ・情報保障の意識を向上する。(見て分かる環境作り、常に手話のある環境) ・幼児に十分な活動の時間を確保するために時制の見直しを行う。 ・聴力測定、検査類の技術の継承のための研修などを設定する。 ・PDCAサイクルを効果的に運用する。	A	・昨年度の振り返りを活かし、今年度「PDCA(サイクル)」をより具体的に実施したのは良い。 ・豊かな体験の中での心身とコミュニケーション、人間関係の基礎作り、今後とも継続して指導してほしい。
		・日々の活動においてPDCAを繰り返し、幼児の主体的な活動を促す保育内容・環境を工夫する。	B					
		・発達に応じた指導を系統的に行うため、年間指導計画の内容を検討・改善し、日々の教育活動に活かせるようにする。	B					
	豊かなコミュニケーション環境を保障し、日本語の基礎を育てるとともに、専門性の継承に努める。	・生活全般を通して、視覚情報を用いて見てわかる環境を保障し、聴覚、手話、文字等の様々な手段を活用したコミュニケーション活動を展開する。	B					
		・遊びの前後には、幼児同士が経験や思いを言語化し主体的に伝え合ったり、思考を深め合ったりする場として「話し合い」活動を設定する。	B					
		・聴力検査や補聴器等の調整の技術継承のため、自立活動担当者による研修の時間を設定する。[各教諭週1回以上]	B					
様々な体験を通して、人間関係の構築を図りながら自己肯定感を高め、障がい認識の基礎を築く。	・人との関わり合いや社会性、協調性、思いやる気持ちを育てるために、合同保育の中で異年齢での幼児同士の関わり合いの場を作る。	A						
	・高良内幼稚園との交流会を通して、自分の障がいやコミュニケーションについて考える場を設ける。[年8回]	B						
	・連絡帳や面談等で保護者との連絡を密にし、家庭でのかかわりについて支援しながら、幼児と共に保護者の障害認識を高める。	A						
小学部	学力を支える語彙の拡充を目指すとともに、体力向上のために積極的な運動の推進を行う。	・学力を支える語彙を増やし、言葉の概念形成を促す掲示ができていないか教室環境を月に一度見直す。	B	B	B	・公開授業などを通して授業づくりを学ぶ場や職員間の情報交換の場を設定して児童の学力向上と職員の授業力向上を図る。 ・児童の体力向上につながる取り組みを検討する。 ・言葉の時間の系統的な指導について年度初めに研修を行う。 ・読み聞かせについては、ゲストティチャーに加え、豊の先生や補助員さんなどに依頼して豊の方に触れ合う機会を増やす。 ・交流における取り組みや障がい認識の学習について、反省を元に系統的で有意義な交流になるよう意見交換を行い、職員の共通認識をもつ。 ・児童にとって有用で有効なキャリアパスポートの作成を目指す。 ・職員がいろいろなことを話し合えるように時間にゆとりのある学校体制を作る。	A	・「学力を支える語彙の拡充」について、今後も効果的、継続的指導力向上を期待します。 ・生活言語が十分に育っていない児童に対して学習言語につなぎ、教科目標を達成できるように、思考するための言葉を育成してほしい。
		・オープンクエスチョンを意識した発問を考え、児童の思考が深まるような授業作りをする。	B					
		・食育や体力向上のための取り組みを継続的に行い、児童が意欲的に取り組み、学習の視覚化ができるような掲示を行う。	B					
	発達段階に応じて、意見を発表したり話し合ったりする場を設けるとともに、ろう者・聴者との多様なコミュニケーションの場を設定する。	・国語や自立活動の時間を中心に、言葉を手話や指文字、書字に変換することで音韻意識が身につくよう指導の工夫を行う。	A					
		・ライフスキルの考え方を取り入れた道徳や特別活動の学習を行ったり、年に2回児童総会で学部の課題を出し合い話し合ったりするなど、異年齢集団での話し合い活動を設定する。	B					
		・学期に一度、ろう者による読み聞かせ会を行う。(低学年)	B					
	交流及び共同学習を通して、発達段階に応じた障がい認識を学ぶ場の設定を行うとともに、自己肯定感を高める取り組みを行う。	・各学年の交流及び共同学習における取り組みや児童の実態について、学部で情報交換を行い、系統的な障がい認識の学習について協議する場を設ける。 ・年度はじめにキャリアパスポートを作成する。	B					
		・キャリアパスポートについて、より有効な形式になるよう年度末に学部で協議する。	A					
			B					
中学部	基礎的・基本的な知識・技能を主体的に学び、自ら活用していくための資質や能力を育む。	・個の教育的ニーズに応じた教育課程等の検討・見直しの機会を設定する。[各学期1回以上]	C	B	B	・教育課程や学習グループの編成に活用するため、学部に於いて生徒の学習状況などを話し合う機会を設ける。 ・生徒の生活習慣改善に向けた取り組みを学級・学部で行う。 ・自立活動をより計画的に実施するため、具体的な年間計画を作成し、見直しをもつことができるようにする。 ・特設授業(人権・性教育・平和学習など)の計画的な実施のため、教科等の中に位置付け、年度当初に実施日を決定する。	A	・昨年度に続き、自己肯定感を高める指導の目標達成は評価できる。 ・学校から巣立ち、次につながるためのライフスキルや障がい認識、書記日本語指導など、中学部の役割は大きいと考える。
		・生徒の主体的な学びを支援するためにICT等を活用した授業実践を行う。[各学級、年間3回以上実施]	A					
		・健康的な体づくりのため、委員会活動や学級活動を活用し、生徒自らが生活習慣を確認・改善できる機会を設定する。	B					
	書記日本語を中心とした言語力と実践的なコミュニケーション力を育む。	・生徒の言語面やコミュニケーションに関する課題を把握し、学部会等で目指す姿を共有する。[各学期1回以上]	B					
		・書記日本語指導についての学部内研修を実施する。[年間2回以上]	A					
		・学校間交流などを通し、生徒が様々なコミュニケーション方法で他者と接する機会を設定する。[年間3回以上]	B					
	障がいを含めて自己と他者を肯定的に認識し自信と誇りをもって主体的に生きる力を培う。	・生徒にとってロールモデルとなる成人聴覚障がい者を招く機会を学部として設定する。[年間1回]	A					
		・社会性の向上のため、ライフスキルに関する指導を実施する。[各学期1回以上]	B					
		・生徒自らが自分や身の回りのことについて考え、障がい認識・社会性を高める機会として弁論大会を実施する。	A					

自己評価及び学校関係者評価を踏まえた今後の改善策

- ・学校教育研究の効果的・効率的な推進とPDCAサイクルに基づく授業改善
- ・聴覚障がい教育の専門性の継承及び人材育成
- ・ICTを活用した教育活動の充実
- ・聴覚障がい児乳幼児支援に係る取組の充実(校内・外の連携強化)

評価項目以外のものに関する意見

手話を使つての授業や見てわかる教材の工夫等、先生方のスキルの高さを感じる。少人数だからこそできる、個にあった教育が実践されていると思う。